

吉波南海雄顧問（左）と吉波忍会長。複雑な折り目の青い布も横に置かれた型紙に折り込むことで作られた＝牛久市小坂町

# 布に複雑な折り目



## 牛久の加工工場「南海プリーツ」

# 1000枚以上の型紙保有

カーテンや制服のスカートでなじみのあるプリーツ（ひだ）。その加工を手掛ける牛久市小坂町の工場「南海プリーツ」（吉波剛社長）は、パリコレに出展するブランドの素材やきゃりーぱみゅぱみゅさんの舞台美術に加工した製品が使われるなど、ファッション業界から注目を浴びている。南海プリーツは1968年創業。従業員30人ほどで婦人服や制服のスカートを中心に、プリーツ加工を行っている。ひと口にプリーツと言っても、その種類はさまざま。一般的な「蛇腹折り」だけでなく、格子柄やジグザグ模様、立体的なバラのモチーフなど複雑な折り目も表現する。仕組みはこうだ。折り目の付いた2枚の厚い型紙の間に布を挟み、折り目に沿って布を折り込む。型紙ごと釜に入れ蒸気で熱を加えると、布に半永久的に取れない折り目が付く。

同社では千枚以上の型

て布を折れば、どんなデザインも表現することができるという。ファッション性が高いものにも対応し、評価を得ている。

「安い裏地も、私たちの手でひだを折ることでファッションになっていく。吉波社長の父で顧問の南海雄さん（80）はそう言い、プリーツ加工を、布の魔術と表現する。

プリーツの手法を用いて開発した商品もある。折り紙をモチーフにした形状記憶折り布「プッチペット」だ。液晶画面などの汚れを拭き取るクリナーで、折り鶴や富士山、ペンギンなどの形に折られた布は、広げても、自然と元の形に戻っていく。ポリエステル素材にプリーツ加工を施すと形状記憶する特性を生かしたもので、外国人観光客に人気があるという。

南海雄さんと弟で会長の忍さん（69）が創業してから50年。次を担う吉波社長は、海外市場への進出も見据える。「海外でプリーツ加工の技術はなくなってきたいて、もはや日本の技術はトップレベル。高い技術を世界中の皆さんに知ってもらえればこの上ない幸せです」

（鈴木里末）